

令和元年 北海道小学校長会 地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：オホーツク地区
- 2 事例報告学校名：紋別市立南丘小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 橋本 雄一郎
- 4 キーワード：「環境と習慣」

紋別市はオホーツク海に面した人口約 22,000 人の漁業と酪農のまちで、市内には小学校 6 校、中学校 3 校、高校 1 校がある。古くは鴻之舞金山で栄えたが、JR 名寄本線の廃止、道都大学の撤退などにより、人口減少が続いている。過疎化の影響は学校にも及んでおり、本校の児童数もピーク時の約 6 分の 1 の 100 人前後にまで減少。職員数も減る中、新学習指導要領の全面実施を控え、大きな曲がり角にさしかかっている。

■「環境と習慣」で、子どもが学びやすく、先生が働きやすい学校に

先生の若返りがオホーツク管内でもいち早く進んでいる紋別市では、指導技術の伝承が課題になっている。そこで、本校では、教室設営・持ち物・机上の配置などのルールを統一し、個々の先生の経験に過度に頼らずに一定の教育水準を確保することに努めている。

学年が変わっても、先生が変わっても、環境やルールが変わらないので安心して学べ、先生も教室設営の負担がない。また、交流に来る特別支援学級の児童にも優しい空間になっている。



本校で、とりわけ特徴的なものに、「勝ち色鉛筆」と呼ばれる特製の鉛筆がある。色が人のパフォーマンスに与える影響を応用し、それぞれの子どもが最も力を発揮できる色の鉛筆を用意。授業中、すべての子どもが使う。持ち物の用意を通して、自分の学習に対する責任感が芽生え、準備行動がルーティン化し、授業に臨む心構えができるため、結果的に授業に集中でき、学力の向上にもつながっているものと思われる。

■バスより先にバス停に行く＝チャイムの前に席に着く「モビリティマネジメント教育」



6 年生の修学旅行は、札幌市において、地下鉄・路線バス・JR などの公共交通機関を使って実施する。公共交通機関の利用には、情報を取捨選択し、目的地到着から逆算して自分の行動を組み立て、場に応じて判断することが求められる。

こうした公共交通機関の教育的特性を生かし、よりよい移動者となることを目指す教育をモビリティマネジメント教育と呼ぶ。バスより先にバス停に行かなければバスに乗ることはできない。それを、校内においてはチャイムより先に席に着くこととして指導している。

地元バス会社とも協力し「バス教室」も実施。落としや忘れ物をしない、放送をよく聞く、公共の場でのマナーを守るといったことを含め、低学年の段階から指導している。

■学校図書館を核にした地域との連携による教育づくり

本校は、文部科学省「学校図書館ガイドラインを踏まえた学校図書館の利活用に係る調査研究事業（取組拡充型）」の実践指定校になっており、学校図書館の整備や利活用を地域とともに進めている。



① 調べ方・学び方の指導 市立図書館司書との授業

学校司書が未配置の紋別市では、市立図書館の巡回司書が週 1～2 回来校。本の紹介や学校図書館の管理業務だけでなく、授業で必要な資料の準備や調べ学習の支援など、学級担任などと連携し、積極的に子どもたちの学習に関与している。



② 「読書通帳」紋別高校 総合ビジネス科で制作

本校に隣接する紋別高校の総合ビジネス科の授業として、高校生に「読書通帳」を制作していただいている。通帳 1 冊に 20 冊分の読書の履歴を書くことができ、いろいろなデザインの通帳を集めることが子どもたちの励みになっている。



③ 「南小農園」販売体験 売り上げは図書費に

キャリア教育と関連させ、地域の達人を「畑の先生」として招聘。校内で商品作物の生産・販売体験を実施している。売上は、蔵書が不足している学校図書館の本の購入に充てる。作物の一部は市の中心部にあるバスターミナルの売店にも置かせていただいている。



④ P T A で新聞・雑誌コーナー設置 広がる News な話題

P T A 予算で小学生新聞 3 紙、社会や科学の雑誌 3 誌を定期購読。朝や昼休みには、コーナー周辺に「常連さん」を中心に、自然に子どもの輪ができる。昼の校内放送でも放送委員がニュースを紹介。記事の要約を宿題にする先生もおり学力向上にも役立っている。



⑤ 読書感想画コンクール「走る作品展」 バス会社と共催

冬休み中の読書活動推進のため、地元バス会社と共催で読書感想画コンクール「走る作品展」を実施。バスで市立図書館に行く動機づけにし、読んだ本の感想画を描く。優秀作品は車内の広告スペースに展示。社長賞・校長賞の賞品は実物の「降車ボタン」。

■紋別高校との連携 プログラミング教育・学習サポート

紋別高校とは、電子機械科とも連携。プログラミング教育のカリキュラム作成や教材開発を一緒に行っている。また、長期休業中には高校生による学習サポートも実施。小学生とのふれあいが、将来の進路として教育に関心をもつきっかけになるケースもあり、双方にメリットのある取組になっている。

